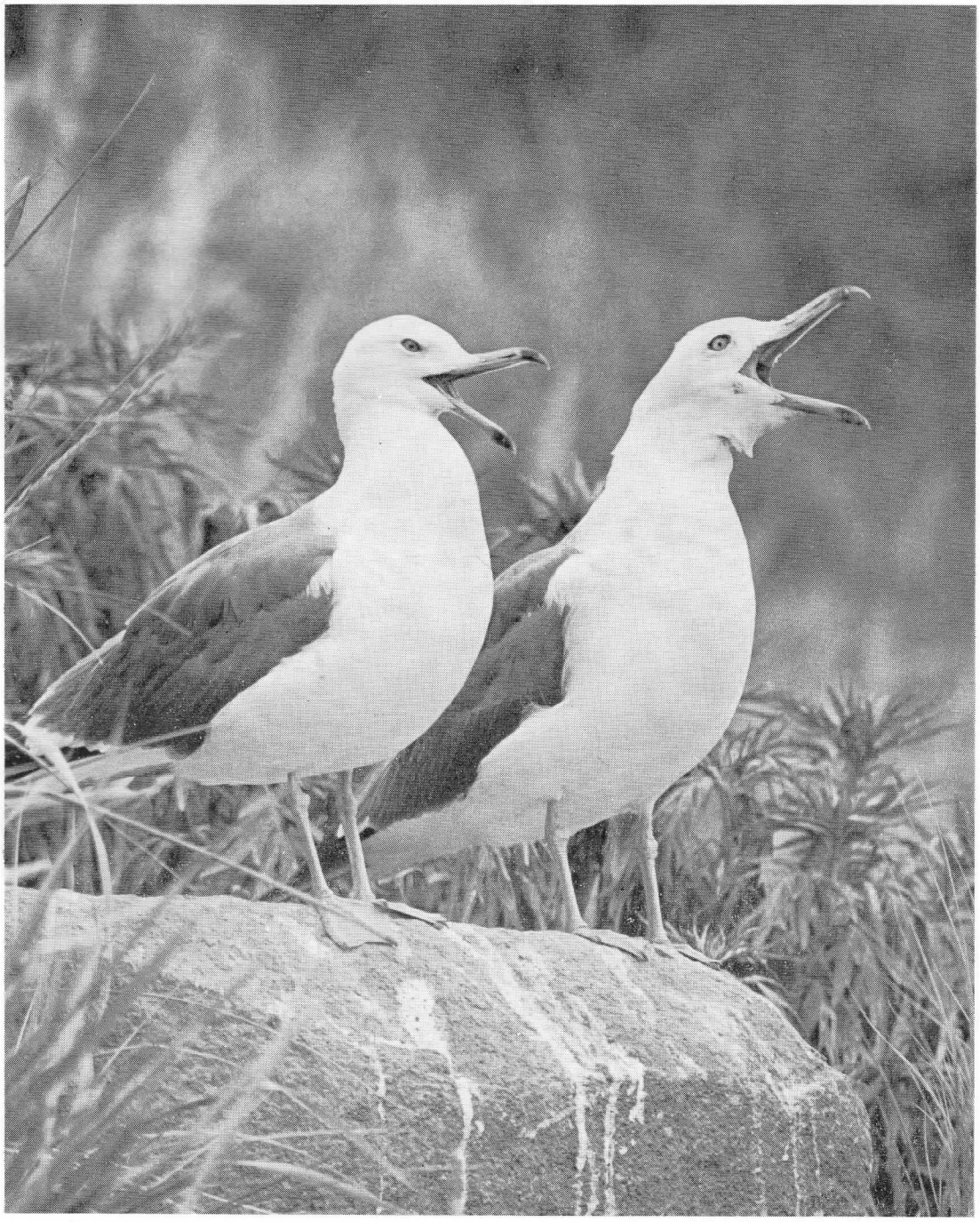
野鳥だより —北海道—

第 2 2 号
編集者 北 海 道 野 鳥 愛 護 会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭 和 51 年 1 月 21 日



ウミネコのつがい　天売島で　昭和49年7月28日　撮影 入 江 義 智

北海道のモズ類（その1）

――アンケートの集計結果――

小　川　　巌

はじめに

私がモズ類（モズ、アカモズおよびオオモズ）の生態と分布の研究を始めてから丸6年になる。生態調査に関しては一定の場所を選定し、そこに腰を落ちつけて何年間ものデータを蓄積することが不可欠で、道内では札幌市内の北大構内、植物園、月寒（北農試場内）、東米里、それに斜里郡小清水町を主なフィールドにしてきた。

一方、分布を調べるとなると、北海道の面積からしてかなりの年月を費やす覚悟が必要になってくる。十二分に時間と労力をかけて自分の足で各地を調査して回るのが最善なのだが、これまで折りにふれて調べて回った区域はごく一部に過ぎない。またモズ類に限らず、特定の種に注目してその分布をまとめた仕事は、北海道においては皆無の状態にあると言ってよく、既存の資料もごく限られたものしかない。

そこでとりあえずの策として、各地に点在する野鳥愛護会の会員を中心とした同好者にアンケート用紙を送り、モズ類の動向について記入してもらうことを思い立った。

それからほぼ一年が経過し、どうやら地図上に生息状態をプロットできるていどの情報が得られたことでもあり、回答を寄せられた方々へのお礼も兼ねて概要をとりまとめてみた。この報告がモズ類の分布を知る上での一助になれば幸いである。

アンケートの狙い

「モズとアカモズに関するアンケート」と題するこのアンケートでは、おおよそ次のような項目について設問した。

1　モズとアカモズの記録の有無
2　モズとアカモズの繁殖記録の有無
3　両種の渡来および渡去時期
4　両種の繁殖時期
5　両種の個体数の比較とすみ場所の相違
6　オオモズ、チゴモズの記録

以上がアンケートのおおまかな内容である。単に生息、繁殖の確認に留まらず、生態的な資料もあわせて得ることを当初の狙いにしていた。しかし、個別の種に関しての設問もかなり詳細になるため、記入に際しては苦労された向きも多いのではないかと思う。むしろ分布状態の把握を第一義におく以上、もっと簡潔にすべきだったかもしれない。

アンケートは道外の数名を含め100通ほど送った。そのうち回答を寄せられたのが45名（昭和51年3月5日現在）で、その内の5名は無記入、あるいは回答不能としてあったため、結局有効回答は40名である。また記録の範囲を原則としてその人の居住する市町村内に限定した。回答が重複した区域と、一人で複数区域を回答してきた場合とを差引いた37区域について何らかの情報が得られた。それに私自身の記録と若干の聞き取り例を加えて作成したのが図1～3である。なお、回答者が地域的

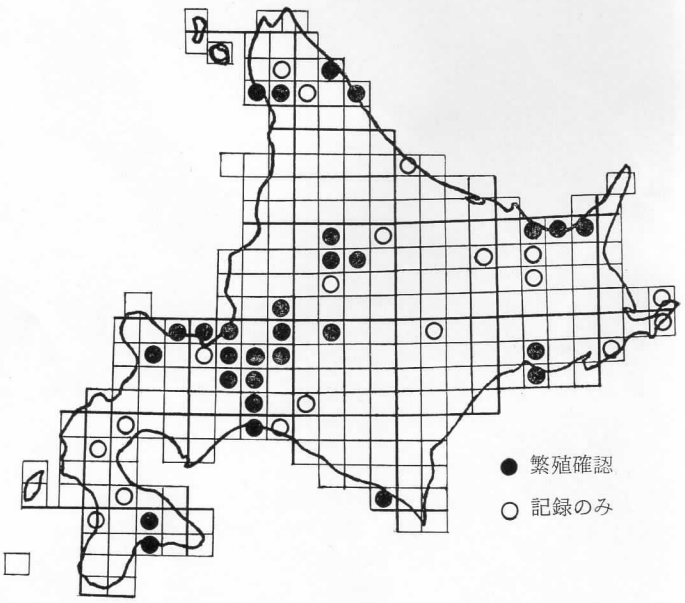


図1　アンケートによるモズの分布
（1997年まで）

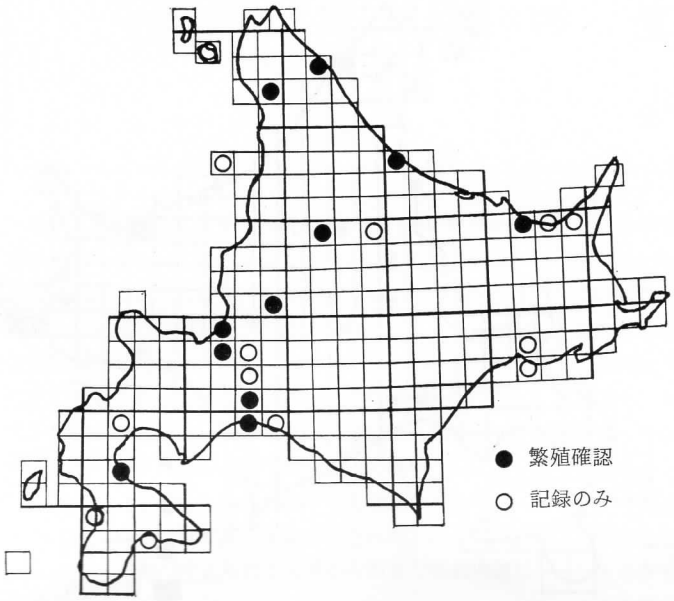


図2　アンケートによるアカモズの分布
（1975年まで）

にバラついている点は避けられず、日高支庁管内は1名十勝支庁管内はゼロであったことを付記しておく。

分布のあらまし

回収したアンケートをもとにして、分布の状態を地図上にどう表現するかが問題であった。限られた情報量から分布を的確につかもうとすること自体矛盾した作業であるが、道内を5万分の1地図に相当する区画に区切り、回答を得た区域に相当する区画に印をつける方法を採用した。

その概要をまとめてみると、次のようなことが言えそうだ。まずモズの分布はほぼ全道におよんでいるとみて間違いなさそうだ。ただ根室地方ではごく少数が観察されるていどで、釧路、宗谷地方もおしなべて同様の傾向にあるものと思われる。一方、道央、道南地方では、開けた場所であればどこででも観察できる。

これにくらべてアカモズの分布はやや特異的である。図2からも知れる通り、ほぼ全道に分布しているとは言え、観察記録はモズよりはるかに少ないなどはその現われとみるべきで、事実「モズとアカモズのいずれが多いか」という設問に対して、不明非回答を除いた29例のうち、実に27例（93%）でモズの方が多いと答え、「アカモズの方が多い」（羽幌町・天売島）、「同じくらい」（小清水町）が各1例に過ぎない点は注目してよい傾向であろう（表1）。私が詳細な生息調査を継続している札幌市内、小清水町の状況をみると、生息場所に偏りが認められ、モズとは幾分異ったすみ場所選択をしているものと思われるが、これに関しては改めて報告することにしたい。

オオモズの記録もほぼ全道におよんでいるものの（全部で29例：アンケート以外の聞き取り記録を含む）、オホーツク沿岸地方での観察が多いのが特徴である。しかし今後より詳細な調査によって、分布の空白地帯はいづれ埋められるものと思う。なお記録時期を月別にとってみたのが表2で、秋～早春にかけて記録されていることは、個体数の増減はあるにしても冬の間ずっと滞留していることを示唆しているものと思われる。

この他、これまで本道では焼尻島での採集例が1回あるだけのチゴモズの目撃記録が数例あることと、本来北海道では夏鳥とされているモズが冬期間も観察された例が若干あることをつけ加えておきたい。

おわりに

各地域別ないしは環境別の鳥類相のデータの蓄積に乏

表 1. モズとアカモズの個体数の比較（区域数）

モズ＞アカモズ	27	
モズ＞アカモズ	1	（羽幌町天売島）
モズ≒アカモズ	1	（小清水町）
不　明	16	
合　計	45	

表 2. オオモズの記録時期（記録回数）

10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	不明	合計
1	5	5	5	2	6	1	1	3	29

しい本道にあって、個別の種の具体的な分布に至っては全くつかめないのが実状である。今回自分が研究対象にしているモズ類の分布図作成の必要性を痛感し、多くの方々の協力を得てようやくその概要をまとめることができた。その結果チゴモズを除いた3種のモズ類が道内各地で確認される可能性は大きいことがはっきりした。

この分布図を基礎にして、空白地帯の分布調査を今後も継続していくのはもちろんのこと、会員諸氏からの情報を得て、さらに綿密なものにしていければ幸いである。皆様方の御協力をあおぐと同時に、これが本道における他種鳥類の分布図作成の契機になればと念願している。最後にアンケートに快よく回答下さった皆様に誌面を借りて厚くお礼する次第です。回答を下さった方のお名前と区域は次の通りです。

佐藤辰夫（苫小牧、様似）、中田千佳夫（浜中）、有沢浩（富良野・山部）、梅木賢俊（利尻）、門脇勲（釧路）、石川純雄（興部）、斎藤竜司（砂川）、山口二郎（七飯）、児玉仁志（北見枝幸）、杉山梧郎（釧路）、富士元寿彦（幌延）、奥出功（美瑛）、鷲田善幸（北見）、水本八弥（函館）、中村章三（厚沢部）、久保久（小樽）、野原直人（長万部）、高木達夫（岩見沢）、杉野雅加津（岩見沢）、入江義智（千歳）、森信也（斜里）、沖原利治（穂別）、小山政弘（千歳、恵庭）、佐藤康男（豊富）、宮崎政寛（苫小牧）、居森勘太郎（当麻）、我妻庄三（今金）、坂本正二（白糠）、荒川晴郎（苫前）、坂本正雄（共和）、野口繁雄（羅臼）、嶋崎忠直（羽幌・天売）、八雲町愛鳥クラブ（八雲）、田所信久（天塩）、掛川岩太（八雲）、中條良作（上川）、山本永人（根室）、橋本正雄（釧路）、広野孝男（羅臼）、百武充（弟子屈）、城殿博（小清水）、藤巻裕蔵（旭川・東旭川、美唄）、高田勝（根室）、山内昇（浜頓別）。以上敬称略。

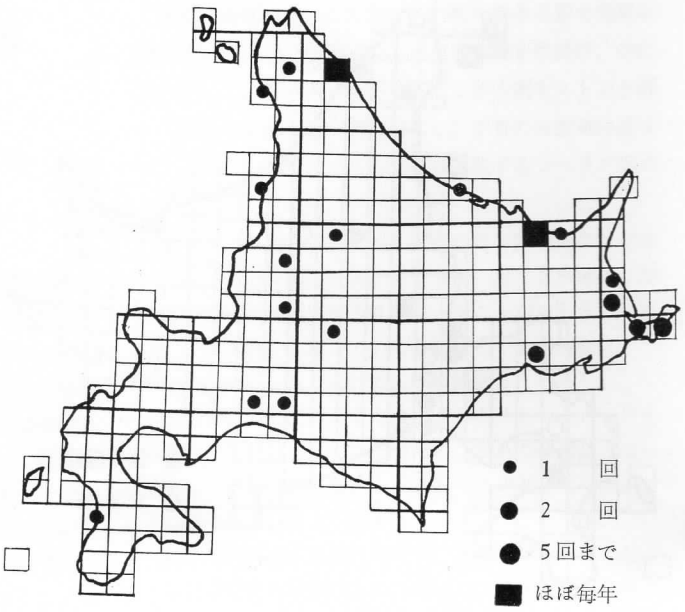


図3　オオモズの記録
（1958年～1975年）

高鳴きをするモズ　　幌延町で
1974年9月11日　　富士元寿彦

（北海道大学・大学院生）

野付の夏鴨

三浦二郎

今年（昭和50年）の4月の異動で、尾岱沼の野付中学校に転勤しました。この学校ではかってオオハクチョウの救護活動で有名になり、そのことで数々の表彰をうけた歴史をもっており、会員の諸兄姉の中でもそのことを記憶されておられる方が多いだろうと思います。

その救護活動というのは、たしか昭和42年の冬のことで、異常寒波の襲来によって湖面が全面的に凍結し、そのため越冬中の白鳥が採餌不能になって餓死寸前になっていたのを、本校の生徒が氷切りの先鞭をつけたこと（それがきっかけで自衛隊の出動がなされた）、その時の給餌によって餌づけされたこと等がその主な活動内容だったのです。

今では全国的に白鳥の渡来越冬地がふえ、各地で給餌活動もなされているようです。尾岱沼の白鳥も観光客の手から餌をとる程に馴れていますが、野鳥に対する給餌の是非が議論される時勢ですので、そのあり方の問い直しも必要でしょうが、その時点での救護活動はそれなりに評価されてよいと思います。

さて、そういう地域に勤務するようになったことは、愛護・保護活動を抜きにした、単なる野鳥観察だけでも好きな私にとっては恵まれた環境に来たということになります。転勤した4月当初はまだ湖面が凍結しておりましたので、前記白鳥の救護活動の舞台であった春別川河口部に白鳥が見られたのですが、湖面の氷が消えるに従って他のカモ類と共に沖合いから当幌川河口部の方に移動していきます。

その白鳥の群の移動につれて私の観察場所も湖岸沿いに北に移動し、そういう中でたまたまヒドリ・ヨシガモ混群の中にアメリカヒドリ♂の姿を見つけて大喜びしたということもありました。

4月29日、干潟生息鳥類全国一斉調査の当日は百武氏御夫妻の応援を得て、この当幌川河口部を重点に調査しました。今年は春の天候不順のためか白鳥の渡去が遅れその日もオオハクチョウ591羽をカウント出来ました。（白鳥の渡去は5月1日でした）

このようなことで、尾岱沼に来てからしばらくの私の観察地点は沼の内ふところにあたる当幌川河口部に重点がおかれるようになったのです。白鳥が去ったあとはタンチョウの観察地点でもあったからでもあり、その後はシギ・チドリの観察のため野付半島に移動しました。

従って春別川河口部にはついつい御無沙汰勝ちになっていたのですが、6月17日たまたま通りがかりに車を止めて見た所、川口砂州の上にスズガモがかなりの数憩っているのです。カウントの結果総数420羽、そして奇態なことに殆どが雄で、雌は僅かに33羽なのです。

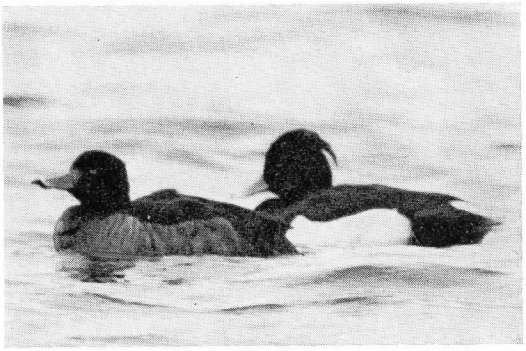
これは一体どういうことなのでしょう。尾岱沼ではスズガモ、キンクロハジロが多いのですが、他のカモ類が渡去してからでもかなり遅くまで沖合いに残留しているのは気づいておりました。風蓮湖や根室の長節湖でもそういう傾向がありますが、これ程多くいるのを観察したのは初めてです。

その後6月一杯、そして6月を過ぎても沖合いにスズガモの群らしい姿を見かけましたが、きちんとカウントできるような状態ではなく、またそれがキンクロであったのかも知れません。いずれにしても、道東（一部か全域かは分りません）少なくとも尾岱沼に夏鴨がいることは確かです。昨年の観察日記をめくってみましたら〔7月17日、スズガモ86羽、春別川河口〕とありました。

前記一斉調査の時、海岸沖合いにキンクロ201羽、うち雌はたった12羽という一群をみかけました。種類はちがっていても、似たような群構成であり、このような雄優占のカモの群の行動はどういうように解釈すべきなのでしょう。私の判断では繁殖行動をしているものとは思えないのです。しかし、単なる非繁殖鳥群として片づけていいものなのでしょうか。

このような雄優占の越夏カモ群について他の地域での情報や、これに対する的確な御見解をお持ちの方は御教示頂きたいと思います。来年はもう少しきちんとこの群の行動を追ってみたいと考えております。

（別海町尾岱沼）



キンクロハジロの♂(右)と♀(左)　撮影　萩　千　賀

昭和50年秋の
鵡川河口観察記録

小林清勇
萩千賀
羽田恭子

昭和50年秋の鵡川でのシギ・チドリの記録です。広々とした牧場、哀愁をおびたシギの声、集団で飛翔するシギ・チドリの群。時にはハヤブサにおそわれ、あわやと思うところで身をかわすチドリ。全く見飽きない光景です。51年春の渡りを注目しませんか。

北海道は広大な地域、観察者が少ないなどの理由で、今までの記録が少ないといわれています。皆の観察記録を持ち寄って埋め合わせ、いくらかでも今後の参考になればと思い、小林清勇、萩千賀、羽田恭子の記録を表にまとめてみました。

時間は汽車の関係で9時30分から14時30分までです。

8月30日、羽田は黄金ドライブインから海岸よりのコ

	月	8	〃	〃	〃	9	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	日	27	30	30	31	5	6	7	10	14	15	16	18
	観察者	羽田	羽田	小林	梅木 萩 羽田	羽田	小林	萩 柳沢	羽田	小林 萩 羽田	小林 萩 梅木	羽田 宮川	羽田
1	コチドリ	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	—
2	シロチドリ	—	1	—	1	2	1	—	—	1	1	3	1
3	メダイチドリ	25	30	19	18	50±	26	100±	50±	10+	13	20+	3+
4	オオメダイチドリ	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
5	ムナグロ	1	70	40±	26	8	6	4	3	8	13	—	6
6	ダイゼン	11	6	6	4	7	3	+	4	5	3	6	11
7	ケリ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	キョウジョシギ	2	—	—	3	1	—	—	—	—	—	—	1
9	トウネン	30	15	6	6	23	11	6	9	13	3+	9	20
10	オジロトウネン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	ウズラシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	ハマシギ	3	6	4	6	6	8	10	—	46	64	50+	70+
13	サルハマシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	1
14	コオバシギ	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15	オバシギ	—	20	—	3	6	—	4	—	—	—	—	—
16	ミユビシギ	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—
17	ヘラシギ	—	—	—	—	—	—	1	1	—	1	1	1
18	キリアイ	—	1	1	—	3	2	6	2	5	7	4	5
19	ツルシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	11	7
20	アカアシシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
21	アオアシシギ	—	—	—	1	3	—	—	1	1	6	12	3
22	タカブシギ	—	1	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—
23	キアシシギ	—	—	—	—	—	1	—	—	1	2	1	2
24	イソシギ	—	—	—	—	2	1	—	—	2	1	1	2
25	ソリハシシギ	3	2	3	3	2	1	4	1	4	2	3	3
26	オグロシギ	—	4	4	11	11	10	35	1	3	2	23	8
27	オオソリハシシギ	—	—	—	—	2	2	—	1	1	3	8	13
28	ホウロクシギ	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
29	チュウシャクシギ	5	—	—	—	—	4	—	—	4	1	—	—
30	タシギ	1	—	—	—	—	—	—	—	2	5	5	1
31	アカエリヒレアシシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
32	不明シギ	—	—	—	—	—	—	—	1		—	—	—
	種類数	10	11	9	13	16	13	11	11	17	18	17	19
	合計	83	156	84	85	128	76	171	74	109	133	159	186

ースを通り、小林は牧場からのコースで場所がちがったため、種類・羽数にちがいがあったので、両方のせました。コースがちがったのはこの日の羽田だけで、あとは大体同じコースでの記録です。

9月24日のウズラシギは、1羽はアメリカウズラではなかったかと思いますが、ウズラシギとしてのせました。

8月31日は野鳥愛護会の探鳥会で、16名の参加がありました。

シギ・チドリ以外の鳥も、順不同ですが記します。ムクドリ、ハクセキレイ、キジバト、カワラヒワ、ベニヒワ、ホオアカ、ノビタキ、ヒバリ、エナガ、アオジ、カシラダカ、タヒバリ、ビンズイ、オオジュリン、モズ、アカモズ、ショウドウツバメ、イワツバメ、ツバメ、アマツバメ、ハリオアマツバメ、トビ、チュウヒ、ハヤブサ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ、ミサゴ、ハイイロチュウヒ、ウミアイサ、ミコアイサ、アジサシ、ユリカモメ、ウミネコ、オオセグロカモメ、カモメ、マガモ、クロガモ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ、オナガガモ、ホオジロガモ、スズガモ、アオサギ、アビ、カイツブリ（ミミカイツブリか）、コウライキジ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、スズメ。50種（8月27日から11月15日の間に見れたもの）　—羽田記—

9	〃	〃	〃	〃	10	〃	〃	〃	〃	〃	11	〃	〃		種別合計
19	21	22	24	26	5	10	11	12	16	26	1	2	15		
小林	萩	柳沢 羽田	藤巻 梅木 羽田	羽田 宮川	萩 羽田	小林	小林	萩 羽田	萩 羽田	萩 羽田	小林	萩 梅木	小林		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		3
4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		15
120	26	40	30±	30+	1	61	50	18	1	31	18	—	1		818
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		1
2	—	5	4	4	—	3	3	—	—	—	—	—	—		206
11	4	3	2	3	12	7	6	5	4	10	16	8	7		164
—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—		1
—	—	—	—	—	1	—	1	—	1	2	—	—	—		12
6	2	20	7	15	2	—	2	2	2	—	—	—	—		209
—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—		1
—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		2
67	+	60+	30	20	18	50	111	95	100+	60	83	100+	25		1092
1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		6
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		1
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—		43
—	—	—	2	1	—	12	5	—	—	17	19	—	6		64
2	1	6	5	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—		21
7	2	9	8	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—		65
4	+	11	16	18	1	1	4	3	5	—	—	—	—		86
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—		2
1	3	5	8	3	5	2	3	2	3	2	3	2	1		70
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		4
1	1	2	1	1	2	1	1	2	—	1	1	1	—		22
2	—	1	1	1	1	—	—	1	—	—	—	—	—		16
4	1	1	1	—	1	—	1	2	—	—	—	—	—		42
13	+	5	3	6	7	3	2	3	3	1	—	—	—		158
7	4	5	5	2	17	17	18	24	11	3	4	3	—		150
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		3
1	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—		17
—	—	—	3	—	2	5	—	—	—	—	—	—	—		24
—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—		1
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		1
17	13	15	17	15	15	11	13	12	10	10	7	6	5		
253	45	174	128	109	73	162	207	158	131	128	144	115	40		3311

鳥の紳士録　＞ユキホオジロ＜

百武　充〈絵と文〉

道東では春近くなってから大雪の降ることが多い。

いつか、たまたま出張中に猛吹雪に会い、川湯の温泉に閉じこめられたことがあった。2日めの夕方、ようやく開通した釧網本線で網走に向かったが、列車は何時間も遅れたあげく、斜里で運転打切りになってしまった。

先行のラッセル車が吹溜りに突込んで立往生しているため、ということであった。もう商店も開いていず、仕方なく駅差入れのパンと牛乳をもらい、スチームを通した客車の床に座席のシートを並べてベッドにし、落着かない夜を過した。

翌朝、2列車分を一つにまとめた長い編成の貨客混合列車が2台の機関車にひかれて出発した。列車はしばしば徐行し、停車するときもスリップして動けなくなるのを避けるため、一旦駅を通過してから後退してホームに入るのであった。ほとんど乗客のいない最前部の客車の片隅にうずくまって、私は窓の外を流れる蒸気のきれめからのぞく白いオホーツクに見入っていた。

止別を出て少し走ったあたりで、雪原からわずかに出ている草の穂をついばんでいる鳥の群があった。列車に驚いて全群が飛びたったとき、白と黒に染め分けられた翼が鮮かに目に映った。それは、30羽ほどのユキホオジロの群なのであった。

北極圏の周辺で繁殖するユキホオジロは、冬になると南へ渡る。日本ではまれな冬鳥とされているが、斜里から浜小清水付近、風蓮湖畔、サロベツ原野等の海に近い草原には毎年渡来しているという。オオハクチョウの越冬地として有名な尾岱沼でも、春別川対岸の雪原で採餌している群が毎年あるようで、道東・道北の海岸地方には案外広く渡って来ているのかもしれない。

（弟子屈町・本会参与）

俳句

木村敏男

流氷の空埋めてくる春の鳥

鶸色の雲ぞ待たるる三月や

日だまりに翔つ影翔つ影冬の鳩

鳶の黙雪解の黙にほかならず

長髪となりゆく春の鴉かな

白鳥湖ひとつ遠日を垂らしたり

春寒の鳩やはらかく老ひしかな

真夏の知床に ヤツガシラ

広野孝男

私の住む羅臼温泉にヤツガシラが1羽滞在したので報告する。

〔観察日時〕

75年8月7日	17時15分～17時35分
8月11日	12時45分～13時20分
8月12日	6時40分～7時50分
8月13日	7時　～7時30分
	12時　～12時10分
	17時30分～18時50分

〔場所〕　目梨郡羅臼町湯ノ沢、知床国立公園管理員事務所前の空地及びその附近。空地は二年前に整地された所で、うす茶の石がころがり乾いている。ヨモギ、オオバコ、フキ等が生えはじめている。事務所と空地の間にはアスファルト道路が走り、付近には旅館2軒あり、裏側に空地がある。

〔状況〕7日夕方、事務所前の車道を行くと、ヒラヒラとした鳥が飛んできた。カケスにしてもおかしいので（附近ではカケスは見ていない）、後を追い確認するとまぎれもないヤツガシラであった。電線、電柱にとまった後、前の空地に降りた。何かを捜すように、セッセと歩きまわる。歩くのは早く、立ち止まったりすると、バックと同系色で見失ないがちである。人をあまり恐れない風で、400㎜をかまえながら少しずつ近ずく、15mほどまで近ずけた。黒く細長いくちばし、それとバランスをとるように後に伸びる冠羽、先は黒である。うす茶の顔、体はほっそりと感ずる。黒っぽい翼には白帯がよく目立つ。時折冠羽をさか立てるが、すぐ後にたたむ。空地を歩きまわった後20分ほどで飛来した方向に飛び去った。浅い波状で羽音はせず、曲がりながらの軽やかなものだった。

8日、9日、10日と空地に注意していたが現われなかった。あきらめかけていた11日再び現われ、12日、13日と観察できた。同じ空地を中心に行動していたと思われる。ほとんど地上を歩きまわっていたが、木の枝に二度とまった。警戒の行動である。石の上で羽づくろいするところも二度みられた。エサとしてはミミズらしいのを一度食べていたが、空地にはアリ、クモが多く、それらの小昆虫を食べていたと思われる。13日の夕方、友人と車の中から暗くなるまで見ていたが、最後、じっと動かなくなり、そのまま見えなくなった。飛んだ気配はなかった。翌日、姿はもうどこにもなかった。

〔その他〕　印象としては、どこかおっとりとして、日本離れしており、ゆったりとした大陸、のんびりした古代の生活がよく合う感じであった。

私は当地に住んで3年目（夏は4年目）で、野鳥に目を向けてきたが、ヤツガシラを見たのは初めてであった。

（羅臼町・50・8・21記）

カラーバンド

野村梧郎

野外で野鳥の個体を識別をすることは容易でなく、よほど良い条件に恵まれた特殊な例を除いては、事実上、不可能なことといって良いでしょう。

ところがいっぽうでは、個体識別が出来ないためにいろいろと不便なことが起きます。たとえば濤沸湖・風蓮湖・クツチャロ湖・ウトナイ湖さらには小湊などと、ハクチョウ類の渡来地が各地にありますが、これらの地域をハクチョウ達がどのように移動しているか、たしかなことはわからないのが現状です。

野鳥保護のことなどを考えず、ほったらかしておくだけのことならば問題はありませんが、野鳥たちとその生息環境の保護をはかるには、このままではどうにもなりません。特に渡り鳥の場合は、国際間で協力し合って保護対策を進めなければならず、そのためには正確な情報が是非とも必要です。

この問題を解決するひとつの方法として始められたのが、ハクチョウ類の首と足に、双眼鏡などを使えば少し離れたところからでも記号を読みとれるほどの大きさのカラーバンドをつけることです。

この仕事は英国に本部を置いているＩＷＲＢ（国際水禽調査機構）が中心になり、世界各国が協力して行なうもので、我国では環境庁の委託を受けて山階鳥類研究所が実施しています。またバンドを着けたのは10羽位のものですが、本道の湖沼と青森県の小湊の関係など興味のあることがわかりかけています。バンドの色は世界の各地域で決められており、アジア地域は緑、シベリヤ地区は赤、アラスカは青などとなっています。

（札幌市・本会幹事）

樺太博物館の想い出

佐々木　　勇

昭和の初め20代の頃から終戦近くまでの十数年間、毎年1回、樺太に行っていました。

当時、小樽港から樺太通いの船で日本海岸の本斗港に上陸して北の恵須取に行き、そこから樺太の北部を横断して敷香町に出て、さらに太平洋岸を南下して知取町で一泊し、豊原から大泊に出て帰ったものでした。稚泊連絡航路が出来てからは、専ら大泊から上陸しました。

煙火を販売していたので、各地10店程、全島を独占取引きしていました。戦時になってからは、発煙筒やモギ爆弾等、防空演習用資材を製造して売っていました。樺太では、その年に売った一年分を、翌年、集金して歩いたのです。

ある日、戦争が苛烈になってから街を歩いていると、突然、空襲警報が出て「退避タイヒ」とメガホンで叫ばれて街の人は右往左往してまったく人影がなくなり、1人だけになったことがあった。どこに防空壕があるのか分らないし、他人の家にも入れず、自分の店で作って売った佐々木銃砲店のレッテルの貼ってある発煙筒に追われて逃げまどったこともある。

当時、昭和の初め頃は鳥が沢山いたらしく、鉄砲撃ちが海岸の砂浜で豆シギの大群に向って1発撃ったら、弾に当たったシギの群が、日の丸の旗の赤丸のように砂の上に円く残った、というのも樺太らしい話だった。

早くには敷香ではギリヤーク？等の土人は何でも獲らなければ生活が出来ないので、無税で即ち狩猟免状なしで捕獲が許されていた。

煙火の取扱店は1軒であったが、銃砲関係の店は2軒あって、当時はどこにでもあるような土人いじめをやっていた。銃と弾を貸して大勢毛皮獣獲りに山に出してやるのである。毛皮を持って帰って来ると、安く引取り、酒と女で金を使わせ、スッカラカンになるとまた、銃と弾を持たせて毛皮獣獲りにおくり出すのでした。小樽に火薬の仕入れに来ると猟用黒色火薬6貫匁入れの木箱1箱を仕入れて行くこともあり、如何に多くの鳥獣がいたものかが想像される。

敷香の町の者であったが、冬、3人で国境付近にクロテンを獲りに出掛けて行ったのに、帰って来た時はテンの皮をドッサリ背負って、1人で帰って来たのである。2人は途中、事故で死んだのだといっているが、高価な毛皮が余り沢山獲れたので、一人占めするため、次々と2人は殺されたのだろうという噂が専らであった。

敷香の部落ではどこでも、沢山積んである薪を角型に積み直して一方だけ開けて、上から魚網を仕掛け、中に餌を撒いて、鳥が入ったら巻上げてある網をストンと落しては何羽かの鳥を一網打尽にし、夕食のお惣菜に使うのである。その鳥というのは冬に白化するシベリア系のライチョウであった。

かって、東京の上野駅から浅草に向う路の途中に羽毛製品専門の店があったが、そこで驚いたことがある。北海道からハクチョウを300羽買ったことがあるといっていた。捕獲禁止になってからもしばらく1羽何程という世間相場があったくらいで、相当捕獲されたらしい。

北海道でも大正の末までは、オシドリもハクチョウも狩猟鳥として獲られていたのだが、本道で保護鳥となった後も、樺太は植民地ということでオシドリもハクチョウも獲られていたようである。

豊原に博物館が出来たので二、三度見に行きました。日本式建築美の壮麗なものであった。広大な敷地の中央に建っていて、陳列室は広いガラスで室内が明るくすばらしかった。森林の状態がパノラマ式に展示されていて、キツツキの一群の中にあったミユビゲラの頭部の輝くような鮮やかな黄色が印象的で、今でも眼の底に残っているような感じです。北大博物館に展示されているエゾミユビゲラよりもきれいであったと思う。

大正元年の年、札幌の剝製関係の店で、小さな机の片隅に置かれていたスズメ位の大きさに見えた豆フクロウの剝製を見て、忘れ難く思っていたのですが、ある時、度々遊びに行っていた、当時、博物館の主事であった名取武光先生がなにげなしに「北海道にも昔はスズメフクロウがいたそうですね」と語りかけられて、樺太のスズメフクロウの名が出るたびに、もしや大正元年に見た豆フクロウが、幻のスズメフクロウではなかったかと気になって致し方がないのです。

野鳥ではないが、同じく大正元年の年に、札幌の山鼻で剝製で生活していた津島という老人のお宅で、いろいろ説明して見せてもらったものの中にナキウサギがあった。津島老人は、北大の動物学部で見てもらったが、何というものか名前が分らないのだということであったが正しくナキウサギであった。

話は飛んだが、何といってもあの豊原の博物館が失なわれたのは、惜しいことをしたと思う。

昭和13年に樺太庁博物館要覧・樺太庁博物館案内が、そして昭和16年に樺太の鳥が出版されている。

博物館小史によると、明治39年に樺太民政署に始って豊原林務署へ、次に憲兵隊庁舎に、それから陸軍守備隊兵舎から最後は、昭和12年新築の709坪の地下とも4階建の壮大な樺太庁博物館になったのでした。

（小樽市・本会監事）

≪会　員　通　信≫

武蔵野市　**衛藤たみ子**

熱帯夜の続く時ほど、北海道が恋しくて、羽あらばと思うのみで飛べないのが残念です。藻岩山探鳥の時、早く行ってる人（男の方、かなりお年、若い女性）で、アカショウビンの鳴き声と飛び立って渓間に消えた姿を見たことが忘れられません。

鵡川、野幌、ウトナイ湖、ずいぶん先生方にお世話になりました。石狩の海の濁った色がくっきりと青い海に境界線を描いて、遠く工場の煙突の見える渚に、それでもチドリが餌をついばんでいた光景、つい昨日の事のようです。

今、ベランダの南で境南小学校増築工事で耳を聾するばかりの音ですが、朝夕はシジュウカラで秋を感じます。モズの高鳴きもきこえたようです。裏のケヤキや竹やぶでは春のウグイスも、コジュケイ、ヒヨドリ、オナガ、カワラヒワも聞きました。でもそこが近く11階建のマンションになる由。どうしましょう。

別海町　**三浦二郎**

そろそろシギ・チドリの声がきかれます。9月7日は厚岸湖での観察会を企てております。道東の干潟は、九州北部有明海のような汚染物質のたれ流しや、埋め立てこそひどくありませんが、地盤沈下によって干潟面積が狭くなっているのが心配です。かっての厚岸湖はシギチドリの重要な渡来地でしたが、先日下見をしましたらよほど様子が変っていて驚いた次第です。

深川市　**五十嵐　仁**

深川市にも「深川自然保護協会」が6月27日に発足し、私も会員になっています。当協会の事業で「野生動物の棲息状況に関すること」があり、野鳥についても調査することになっています。また探鳥会も年1回実施する予定です。

8月の月例会の席上で会員2名より、深川市音江町納内町の山林でクマゲラを確認したという報告がありましたので、今後写真におさめたいと思っています。

美唄市　**藤巻裕蔵**

美唄では今年探鳥会を2回行いました。参加者は私の職場の野鳥愛好家が主体です。第1回目は5月に東明公園を、2回目は6月に光珠内を歩きました。参加者は10名前後で、鳥を見て歩くにはちょうどよい人数です。

東明公園は鳥獣保護区となっていますが、野鳥の生息環境としてはあまりよい所ではなく、観察できた種類は多くはありませんでした。6月の探鳥会では、水田地帯から、畑、林を歩き、5月のときより多くの種類を記録することができました。

× × × × × ×

「会員通信」の欄に、皆さんのおたよりをおよせください。今回のたよりは、50年の秋によせられたものですが、掲載のおくれたことをお詫びします。

≪探鳥会のお知らせ≫

帯広市緑ヵ丘公園で毎月1回探鳥会を開いていますので、近くの方はぜひ参加して下さい。集合場所は動物園入口前です。なお日時は次のとおりです。

◇4月25日　午前8時集合

◇5月23日　午前6時半集合

幹事の都合により日程を変更することがありますので、できれば前日にご連絡下さい。

連絡先　48—5111（内線 466）

夜間の場合は　48—9481　藤巻裕蔵

白　キ　ジ

平井百合子

〔撮影場所〕札幌市中央区小別沢町

〔日　　時〕1975年6月12日　午後6時30分

〔状　　況〕初め声を聞く。コウライキジ♂の鳴き声、ケーンケーンに似るが、これより鋭さに欠けた濁ったような音質だった。当地は畑地が多く、彼を発見したのは針葉樹林に隣接するナス畑である。彼はそこで餌を探すでもなく、ゆったりと散歩している様子であった。

〔特　徴〕全身白色、眼は黒で、その周りはキジ類に共通した鮮やかな赤色。ボディーラインは写真のとおり。

〔疑問点〕白子の場合、目は赤ではないだろうか？
目の周りの赤の鮮やかさや、鳴き声は♂のようだが、ボディーラインは♀のようである。♂♀がわからない。

（札幌市中央区界川町1880）

1975年6月12日　　札幌市中央区小別沢町で

〝野鳥だより〟の原稿をどうぞ

野鳥だよりの原稿をお寄せください。観察の記録、珍鳥の記録、随筆、俳句、短歌、野鳥保護に対する意見など、野鳥に関する内容であればなんでも結構です。

なお、投稿される場合は次のことに注意してください。

1　原稿は、400字詰原稿用紙を用いて横書きとすること（できるだけ）。原稿の枚数は5枚位のものを歓迎しますが、もちろん何枚でも結構です。また、初認記録や終認記録など短かいものは葉書や便箋でも可。

2　一般文章は、現代かなづかい、当用漢字を用いて明瞭に書くこと。野鳥や花、木などの動植物の和名は、カタカナを用いて書くこと。

3　原稿は題名、氏名、本文の順に記載し、終りに住所、郵便番号、電話番号、所属、投稿月日等を書くこと。

4　写真は必ず白黒とし（カラーの場合は印刷の仕上りがよくありません）、表紙掲載を希望の場合はキャビネ判か8ツ切とすること。その他、本文中に掲載希望の場合は手札判程度とすること。

5　カットや図は黒インクを用いてケント紙（画用紙でも可）に書くこと。

6　原稿の内容について訂正を必要とするときは、編集幹事がその旨を連絡することがありますが、スペース等の関係で原稿を分載する場合などは編集幹事に一任願います。

7　原稿類は原則としてお返ししませんが、返送を希望される場合は、その旨をお知らせください。

8　送り先は〒060 札幌市中央区北3条西6丁目　道庁自然保護課内　北海道野鳥愛護会（TEL 231―4111内線3895）まで。

お知らせとお願い

本会の会計年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までですが、50年度会費（個人 600円、団体 1,500円）未納の方は郵便振替（口座番号小樽 18287　北海道野鳥愛護会）を御利用のうえ、お送りください。

1月には郵便料金が値上げになりました。これまでは〝たより〟1部25円でしたが、2倍以上のアップ率で、60円になりました。郵送料が本会の支出に大きなウエイトを占めそうです。来年度は、場合によっては会費の値上げを考慮しなければならないかもしれません。

さて、本会には現在600名を越す会員がおります。毎年、何人かの人が新たに入会するとともに、また何人かの人が退会しています。会員数が多くなれば、新陳代謝もこれまた自然の理というところでしょうが、事務局へ連絡をされたうえで退会されるのは結構ですが、まったくの音信不通の方もおります。

送付した野鳥だよりが返送されるケースもあります。身近かの人で入学・転勤等で住所の変った人を御存知の方は御一報ください。一方的に退会という訳にもいきませんので、一度、本誌上で照会しようかと思います。

〈編集後記〉

☆　本誌21号で、〝野鳥だより〟の編集に当たる幹事を選出し、総会で承認された旨お知らせしましたが、名前を紹介しておりませんでしたのでお知らせします。新妻　博、平井さち子、藤巻裕蔵の各氏と私の4名です。ベテランの方もおれば、私のような素人もおります。よろしくお願いします。

☆　ところで、昨年10月、それまで美唄の北海道林業試験場に勤務されていた藤巻幹事が、試験場を退職されて、帯広畜産大学（畜産環境学科野生動物管理学研究室）に転勤されました。今後ますますの御活躍をお祈りするとともに、変らぬ御指導をお願いしたいと思います。

☆　その後、藤巻裕蔵さんの後任として、気鋭の若手生態学者である小川　厳さん（北海道大学農学部大学院）に編集幹事をお願いしました。さっそく御登場願います。　（梅木記）

◇　◇　◇　◇

☆　思いがけず編集幹事の一人に祭りあげられ、会の実務に携わって実感したのは、この会に実体があるのかという点でした。これまで20号を越える会誌が発行されてきたのが不思議な位です。

☆　組織である以上、会の窓口と運営に当るスタッフの双方が揃っていないことには、目的が達せられないのは明らかです。会の運営などに対して苦情を言う窓口も、編集責任者もおかれていなかったとは、何とも迂闊という他はありません。

☆　会誌の発行が十分意義の見出せるものであるならば、責任と裁量を併せもった編集スタッフが〝認知〟されなければなりませんし、根源的には、すっきりした形の事務局体制が確立される必要があると思います。この問題の解決なしには、会誌の発行すら困難であることを強く訴える次第です。

（小川記）